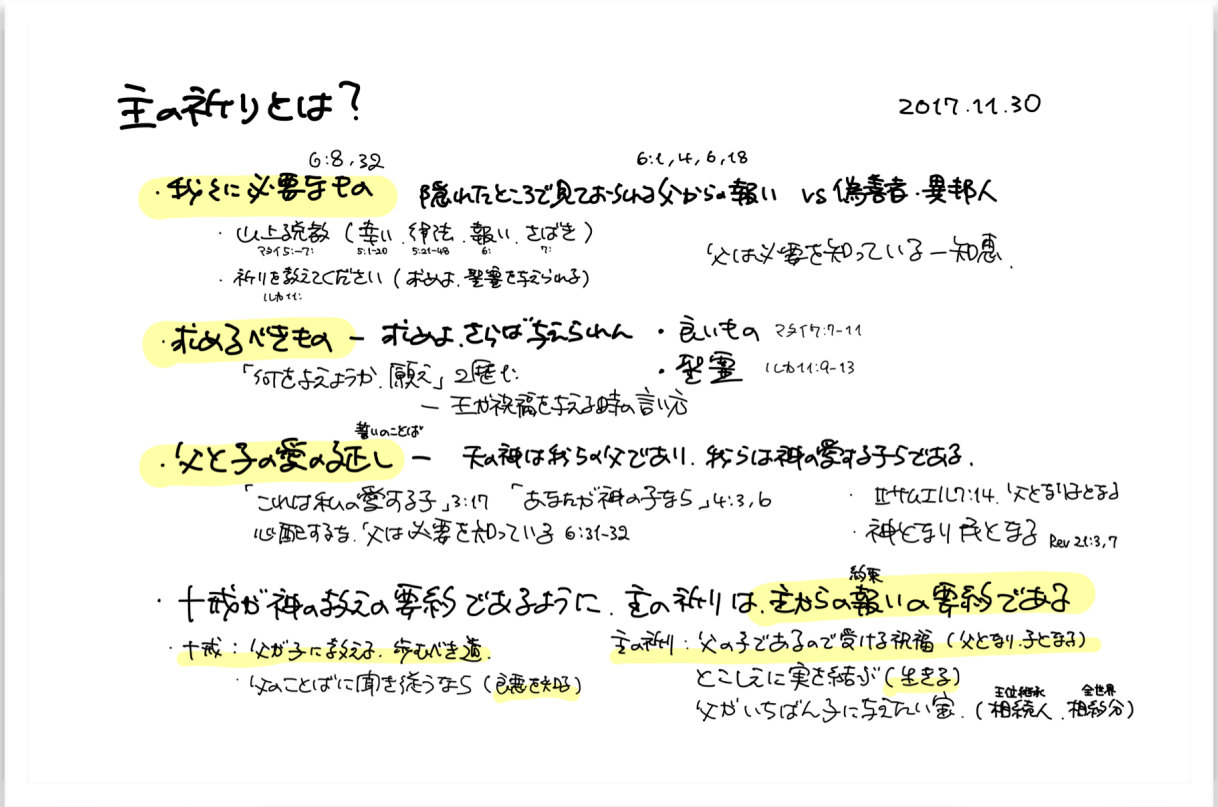
主の祈り #1

主の祈りとは？



主の祈りとは何でしょうか。

「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。御心が天で行われるように地でも行われますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」

この祈りはマタイ6章「山上の説教」の中に書かれている祈りです。祈るときにはどうすればよいかということを教えています。偽善者のようにではなくて、異邦人のようにではなくてということを話しています。「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたの必要なものを知っておられるからです。」と言って、こう祈りなさいというふうに言われます。主の祈りというのは、私たちに必要なもののリストだということが言えます。

山上の説教の中で…山上の説教は4つの段落に分かれていて、報い、律法、報い、さばき(律法)。神様の教えを守るなら祝福される、その受けるものですね…について話している。その中の一箇所として主の祈りがありますけれど、私たちに必要なものです。6章32節、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」と言っている箇所の前にもありますね。「私たちの（あなたがたの）天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」異邦人が切に求めているものではなくてということですね。心配しないで求めなさい。あなたがたに必要なものを隠れたところで見ておられる

父がそのことを知っています。神様の知恵です。隠れたところで見ておられる父からの報い。これが、この主の祈りで教えられているリストになっているところです。偽善者、異邦人のようにではなく。

山上の説教と、平地の説教と言われるルカ福音書の11章にも同じような主の祈りというものが書かれています。ただし、ちょっと別の文脈の中で言われているものですから、少し短いです。「みこころが」というところがありません。それと、「悪者から救われるように」ということも入っていません。そして言っている箇所が違っていますので、それは、あとでその違いについて見たいと思います。

まず、ここでは、我々に必要なものなのだということです。そして、その必要なものは、求めるべきものでもあるということです。求めるべきものであるというのは、山上の説教の中で、有名な言い方「求めよ。さらば与えられん。」ということばは、7章7節にあります。「父がパンを下さいというときに、石は与えません。という箇所です。悪い者でも自分の子供には良いものを与えます。なおのこと、天におられるあなたがたの父がどうして求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。」これが、求めよさらば与えられんという箇所です。

先ほど違っている箇所がありますと言っていたルカ福音書の文脈は、祈りを教えてくださいと言ったところで、その祈りを話すのですけれども、友だちが真夜中にパンを貸してくれと来たときにどうしますかという話が続きます。そして、あくまでも頼み続けるならば、与えられます。わたしはあなたがたに言います。「求めよ。さらば与えられん。」という箇所が続きます。魚を下さいと言うときに、蛇を与えない。卵を下さいと言うときに、さそりを与えない。悪い者であっても子どもには良い物を与える。なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう。求めるべきものが、こちらのルカ福音書が「聖霊」になっています。

マタイ福音書は「良いもの」というように表現されています。同じものですけれども、別の表現の仕方ということも言えると思います。マタイのほうは、良いもの、トブですね。ヘブライ語で言うとトブ、善悪の善、良いもの、祝福。御霊を与えてくださる。これが求めるべきものだ言われていますので、この良いもの、御霊という観点で、この主の祈りの6つの課題ということです。この6つの必要なものは、良いものである。そして、御霊であらわされているものである。御霊の具体的な現れであるということも言えるのだと思います。

「求めよ、さらば与えられん。」ということなのですが、「何を与えようか、願え。」というように言う言い方は、王様が祝福をするときに言う言い方だということです。第2歴代誌1章のところにソロモンが神様に夢の中で言われるところです。「何を与えようか、願え。」と神様が言うと、ソロモンは知恵を下さいという、そのことは神様の御心にかなったということなのですけれども、エステル記の中で、アハシュエロス王が「何を欲しいか願え。国の半分でもやるぞ。」という言い方をします。これは、すべての権威は私にあるということを王様が言って、祝福するときの言い方だということがその箇所からも言えると思います。求めるべきものを求めるならば、王様は喜んで与えてくれるわけです。

ソロモンの箇所からもわかるように。ですから、求めなさいと言われている主の祈りの課題というものは、私たちに必要なものだし、それは、天の父なので、私たちが求めるべきものとして教えられている6つの課題だということも言えると思います。

それは、父と子の愛の証しであるというふうにここに書いてあります。主の祈りが、6つの課題の最初の3つ、それと、後ろの3つ。最初の3つが叶えられると、私たちの神様は父です、私たちの父なのですということが明らかにされる。後ろの3つが成就する、祈りが聞かれると、私たちは神様の子どもですということがわかります。というのが、後半の3つです。

サタンもわかっていました。山上の説教のちょうど前のところ(マタイ4:16〜)、バプテスマを受けられました。そうすると、天からこういう声が聞こえます。「わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と。そうすると、すぐに悪魔が来ます。40日40夜のあとに。試みる者が近づいて来て、あなたが「神の子ならば」と言ってパンの話をします。そして、次に「神の子ならば」と言って試みる話をします。そして、もう一度、3回目に試みます。この試みる者、サタンもわかっているわけです。パンを与えるのは神の子である。パンを与えられるはずだということをわかっていますので、そのことをだまして攻撃してくる。それは、私の子であると宣言されたあとの最初の戦いです。

それで、神様はこの祈りの最初の3つを聞いてくださると、私たちの父です。私たちはあなたの子なのですということの証しなのですけれども、それは、たくさんいろいろな箇所に出てきます。「あなたは私の神となり、あなたがたは私の民となる」神様が、神となって、民となるという言い方は第2サムエルのダビデを祝福するときの約束の言い方にもなっています(7:14)。あなたがたにとって、私は父となり、あなたがたは、あなたの子孫が子となるという約束のとおりにメサイアが来るわけですけれども、「父となり子となる、神となり民となる」これは、愛の一致について表している言い方です。結婚の誓いの時に、「あなたは私の夫です、私はあなたの妻です」というような言い方で誓いをするのと一緒ですね。誓いの関係のある、誓いのことばである父と子の愛があらわされるという、この与えられた必要なもの、求めるべきものが与えられると、このことが明らかになるということです。

その6つの課題は、そのまま、ただ唱えるようにということを言われているというよりは、十戒が神様の教えの要約であるように、主の祈りは、主からの報い、約束の報いの要約ですということが言えると思います。十戒が、父から子に教える歩むべき道。主の祈りは、父が子であるということをあらわすために与えてくださる祝福、その要約である。こちら(十戒)が、父のことばに聞き従う善悪の知識、善悪を知るということを十戒で教えてくれるということであれば、主の祈りは、とこしえに実を結ぶ、生きるということはどういうことかを教えてくれるということになりますので、主の祈りは、永遠のいのちの祝福の要約ということにもなるかと思います。この主の祈りには形があるということがありますので、次に主の祈りの形というのはどうなっているのかというのを学びましょう。

塚本虎二の「主の祈りの研究」の初版序からの抜粋

基督教の何であるかを簡単に知ろうとするならば、その祈りを研究するのが第一である。それは多分キリスト教に関する如何なるものを研究するよりも、基督教を知る近道であろう。幸い基督教には、主イエス・キリスト自身から、信者の祈りの典型として与えられた祈りがある。これがいわゆる「主の祈り」である。極めて単純平明な、ギリシャ原語わずか57語からなる小さないのりである。日曜学校の幼い生徒も自由に暗唱することができる。しかしこの簡単な祈りの中に基督教の全体が集約され、その一語一語、一句一句のうちに宇宙大の秘義と無限の思想とが秘蔵されている。実に主の祈りは、ある哲学者の言うように、「イエスに関する・・最大価値ある財産」である。

「主の祈り」はこのように基督教の「最大価値ある財産」であり、また極めて単純平明であるむにもかかわらず、不思議にもその真の意味が了解されない。殊に永年教会生活をしているクリスチャンまでもが、この祈りの何であるかを知らないことは驚くべき事実である。すなわち今日の教会も信者もこの祈りをただ形式的にとなえるだけで、これがクリスチャンの祈りの典型であり、理想であり、その中に基督教教の奥義が全部秘蔵されていることを知らない。宗教改革者マルチン・ルーテルはかつて主の祈りを「最大の殉教者」と言った。この祈りの本来の意味が忘れられて、ただ徒に形式的に繰り返されることを言ったものであろう。

著者もまたルーテルと共に、教会的形式主義の捕囚となったこの「最大の殉教者」のために義憤を感ずる者である。この小著も・・この「殉教者」のために聖十字軍を起そうとするに過ぎない。もし神の恩寵によって、すこしでもこの光栄ある職責を果たし得るならば、著者の感謝の杯は泡だち溢れるであろう。

昭和4年(1929)3月22日

（塚本虎二は、内村鑑三の弟子の一人で、無教会主義の伝道者）